

2022年1月9日（日）上演⑫

東京都立足立高等学校

## 「オタクのおしごと。」

第57回関東高等学校演劇研究大会（東京会場）

生徒講評委員会 講評文

生徒講評委員会 担当委員

塩崎 竜之丞（東京都 開成高等学校1年）

オタクの活動とアイドルの解散を通じてオタクの情熱、思い、推しを応援するファンたちの心の成長を描いた作品だった。

アイドルオタクの推しを応援し続ける姿や好きなものを追いかける姿、アイドルの応援される心境、いつか必ず訪れる引退の葛藤などをオタクを主役として描いたリアリティのある作品だった。

まず「役者たちが本当に楽しそうだった」という意見が多く出た。全力でアイドルやオタクを演じている姿は爽快だった。またライブのシーンの選曲がすばらしく、また音響の使い方もよいという意見が出た。特に推しの解散ライブへと向かうオタクたちが、ドラマチックな音響によって戦場に向かう兵士のように見え、効果的だった。

演劇部員にオタクが多いことも相まって「それぞれの歩む道を応援するのがファンでしょ？」というセリフや、推しが解散すると決めたことを応援するのかしないのかの葛藤など、共感できる要素が多かった半面、街中で推しと出くわすシーンなどが良い例だが、演劇であるからこそオタクの反応に物足りなさを感じた、リアリティがいい効果と悪い効果を出していたという意見も挙げられた。「オタクの反応が物足りない。もっと振り切ってもっと狂っていてもいい」という意見と「十分すぎた。むしろ大げさすぎた」という両方の意見が出ていることもその影響だ。

舞台など場の使い方に関しては、会場が一体になって楽しんでいて、客席まで巻き込んでいるところがライブを見ているかのような気分させられて楽しい空間だった。だからこそ、衣装や歌にもっとこだわってあげばもっともっと評価が高かった、というオタクの意見が多く挙がった。また、ライブっぽさがテンポの悪さにつながっているのではないかとということも挙げられていた。

他人の決定を受け入れる、ということは自分が応援している人だけではなく家族などの人にも言えることだが、他人の人生と自分の人生の線引きというオタクとしての成長だけではなく人間としての成長も描かれていたのではないかと意見もあった。

好きなものに真剣に、健気に取り組むことの尊さと滑稽さやオタクの理想と愛を詰め込んだ、観た人たちに元気を与えてくれる作品であった。

東京都立足立高校演劇部の皆さん、楽しい時間をありがとうございました。

